

取組内容の進捗状況(平成29年度)

【慶應義塾大学】

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ 海外パートナーシップの強化

2016年11月に設立した慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート(KGRI)をベースに、海外の大学・研究機関とのパートナーシップを強化しています。学内の研究チームが海外の大学を訪問し、先方の研究者との交流を通じて、教育・研究協力関係を構築する「慶應キャラバン」などの取組を世界各地で行っています。2018年3月には、コーネル大学エイナウディ国際研究所と連携協定を締結するなど成果も着実にあがっています。

○ 国際学生寮の開設

2018年3月、日吉キャンパス周辺に元住吉国際学生寮と綱島SST国際学生寮の2つの新しい寮がオープンしました。いずれも留学生と日本人学生が共に暮らし、多様な国際感覚を磨くことのできる混住型の寮です。居室は個室タイプで、2つ合わせて319室を擁しています。この内、綱島SST国際学生寮は、次世代都市型スマートシティ「Tsunashimaサスティナブル・スマートタウン(綱島SST)」内に新設されました。寮内の電力はタウン内のエネルギーセンターから供給され、一部を太陽光発電で補っているのも、綱島SSTならではの特色です。今後、1階のタウンマネジメントセンターのエクステンジスタジオは綱島SSTラボの拠点となる予定で、革新的な実証実験を通して、パナソニックと慶應義塾大学、地域との共同研究拠点としても期待されます。

これで学生寮は計10棟、総収容可能人数は1,524名となりました。今後も、年々増加している世界各国からの留学生をスムーズに受け入れ、さらなるグローバル化を推進するべく、国際学生寮を計画的に整備、拡充していく予定です。



寮内の様子

ガバナンス改革関連

○ グローバル・エンゲージメント・オフィス

教育研究情報コンテンツの統合や、国際広報の充実、ブランドイメージ・マネジメントの強化を視野に入れ、スーパーグローバル事業推進、国際広報、国際連携推進、KGRI事務局、および塾長室企画担当を統合的に配置し、相互の兼務ならびに協力を発令する組織再編を実施してきました。そして、2018年度中期計画において、この組織再編を実効あらしめ、より緊密な連携と柔軟な事務対応を促進するために、グローバル・エンゲージメント・オフィス(仮称)を設置する計画を打ち出し、実行に向けて動き出しました。

教育改革関連

○ Global Interdisciplinary Courses(GIC)科目アンケート実施

2015年度から運用を開始したGICセンターは軌道に乗り、履修者数が増えてきました。開始から3年むかえた今年度、コア科目約70科目について授業アンケートを実施しました。

【質問項目】

1. 英語は理解できましたか？
2. 期待していた通りの授業でしたか？
3. 授業はGICの目的である国際的、または学際的な内容でしたか？
4. 総合的に判断して、この授業は意義あるものでしたか？

(回答: 1. 全くそう思わない 2. あまりそう思わない 3. そう思う 4. とてもそう思う)



GIC授業風景

これら4つの質問の全てにおいて、ほぼ90%の学生が、「4. とてもそう思う」「3. そう思う」と回答しており、満足度の高い授業が行われていることがわかりました。一方で授業を運営する上での学生の英語力のばらつきや、日本人教員の英語力の問題など今後の課題も見えてきました。

○ 国際認証EQUISの継続認証

大学院経営管理研究科は、マネジメント教育に関する国際的な教育品質評価機関であるEFMD(The European Foundation for Management Development、本部:ベルギー・ブリュッセル)による認証EQUIS(The European Quality Improvement System)を2017年6月17日付で継続しました。2014年に続いて2回目の継続認証となります。今回のEQUIS認証継続は、2000年より取得・継続している米国の教育品質評価機関であるAACSB(The Association to Advance Collegiate Schools of Business)による認証とともに、教育・研究の質、教員や在校生・修了生の活動が広く国際的に認められたものと考えられます。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 海外副指導教授制度の拡充

TGU開始直後より実施している本制度は、クロス・アポイントメント制によって海外の教員を博士課程学生の副指導教授として受入れるもので、本年も多くの海外副指導教授を招聘することができました。短期的には国際共著論文の創出などが期待されますが、中長期的な国際化も考慮し、2018年度募集分から大学院での授業やワークショップなどを行うケースにも適用範囲を拡大しました。これによって修士課程の学生も海外副指導教授の指導を受けることが可能になります。

■ 国際的評価の向上につながる取組

○ KGRUにおける国際情報発信(研究広報)

大学のグローバル化をより一層推進し、世界に貢献する国際研究大学となるための基盤、慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート(KGRU)において、国際広報の新たな取組を開始しました。その1つがResearch Frontiersです。学内の研究、研究者についてより深い理解が得られるよう、研究者自身のことばで語るビデオクリップや、世界に向けて発表された最新論文を簡潔にまとめて紹介しています。そしてWEB上に掲載するだけでなく、この情報を世界各地のメディア、ジャーナリスト、海外の研究者に情報を直接届けることで、多くのニュースサイトに掲載され、海外からの問い合わせも届きはじめています。



Research Frontiers

○ APRU-Aging研究拠点が移管

APRU (Association of Pacific Rim Universities: 環太平洋大学協会)の“Population Aging Program(PAP)”が、ニューサウスウェールズ大学(UNSW)から本学に移管されました。現在、本学では、超高齢化社会が直面する課題の解決に向けて、長寿クラスターにおいて、医学、経済学、工学など各分野が連携しながら長寿に関連する研究を進めています。APRUでは、環太平洋地域の課題解決に貢献するため、テーマを掲げて加盟校の研究力を結集したプログラムを実施しています。そのひとつであるPAPは、UNSWをハブ(研究拠点)として2015-2017年に第1フェーズを終えました。大学院医学研究科とKGRUが中心に、高齢化研究のネットワークを強化して社会にインパクトのある研究成果の実現をめざして、UNSWから拠点を引継ぎ、さらなる拡充と発展を目指します。

○ アジア唯一の「IBM Q Network Hub」

理工学部の矢上キャンパス量子コンピューティングセンター内に、最先端量子コンピューター研究拠点としてIBM Q Network Hubを開設しました。IBM Qは、IBM(米国)で開発されている最先端の汎用量子コンピューターで、そのIBM Qのクラウド利用を可能とするアジア唯一のハブとなります。量子コンピューティングの進化を目的として、量子コンピューティングの学習、スキル開発、そして実装の促進に、メンバー企業4社とともに貢献します。本学およびメンバー企業の開発者は、同Hubから、米ニューヨーク州に設置された20量子ビットの商用量子コンピューターIBM Qシステムにクラウドを通じてアクセスし、教員・研究者・学生と密に協力しながら量子アプリケーションの開発を進めます。



IBM Q Hub共通ルーム

【海外の大学との連携の実績】

ダブルディグリーは昨年度より1件増え29件、交換協定校は22校増え345校、海外研究連携拠点は4拠点増え24拠点になりました。研究チームを海外の大学に派遣し、研究者同士の交流を深め組織的な国際共同研究へと深化させることを期待した慶應キャラバンの活動などの成果もあがっています。一方、海外大学の研究チームを受け入れ、学内の研究者と交流をはかるような活動も行っています。2018年2月には、ウィーン大学の日本美術の研究チームを大学院文学研究科が受け入れ、国際シンポジウムなどを通じて研究者の関係を深め、将来の共同研究、ダブルディグリーの可能性等について議論が行われました。このような活動を通じて着実に海外の大学との連携を強化しています。

■ 自由記述欄

○ サイバーセキュリティ国際シンポジウム「Cyber3 Conference Tokyo 2017」の開催

このシンポジウムは、日本経済新聞社・日経BP社主催、慶應義塾大学サイバーセキュリティ研究センター他共催で、「AIでセキュリティ運用はどのように進化するのか」、「サイバーセキュリティマネジメントにおけるリーダーシップのあり方」、「サイバー攻撃に関する官と民それぞれの役割と債務」等をテーマにした、多くの講演やパネルディスカッション、ワークショップ等が行われました。また、オープニングでは、INCS-CoEの活動の一環として、本学とジョージア工科大学との学術交流協定の調印式も行われました。

シンポジウム会場には、政府関係者やサイバーセキュリティ分野の有識者、INCS-CoEに参加している大学の関係者など、国内外から多くの参加者が集い、産官学の垣根を越えた交流が活発に行われました。



シンポジウムの様子